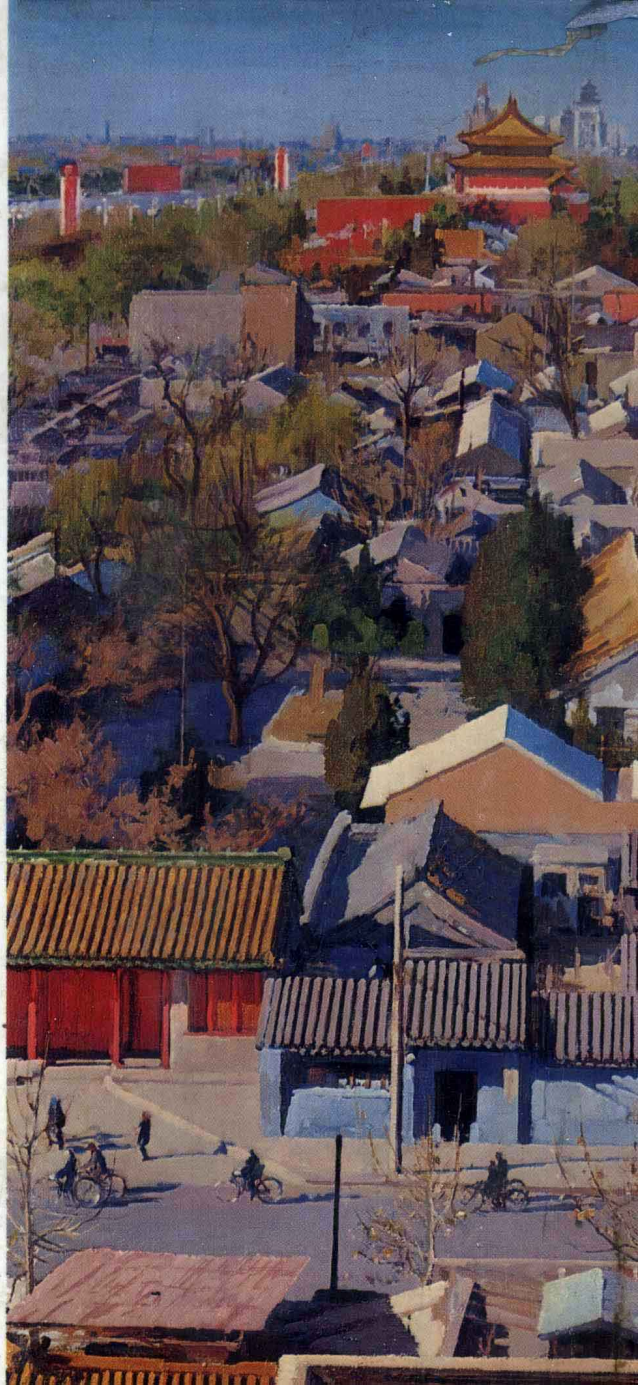
北京の四年

回想の中国

駐中国初代大使
小川平四郎



サイマル出版会

小川平四郎

北京の四年

回想の中国

著者

北京の四年

小川平四郎著

© Heishiro Ogawa
THE SIMUL PRESS, INC. 無断転載を禁ず

（発行所） 株式会社 サイマル出版会

編集発行人／田村勝夫
東京都港区赤坂1-8-10 第9興和ビル（〒107）
電話（03）582-4221（代）／振替・東京4-52090番
印刷・製本 凸版印刷株式会社

＊1977年 Printed in Japan ⟨0395－300379－2703⟩

まえがき——

私は昭和四十八年三月、戦後はじめての大使として中華人民共和国に赴任し、四年余り滞在して五十二年七月に帰国した。昭和十四年四月に外務省在外研究員として二年九カ月北京に留学して以来、三十余年ぶりの中国であった。

初めての大使であったので、赴任から離任までの間、随分珍しい、貴重な経験をしたが、そのつど見、聞き、感じたことを書きとめておいたものを整理し、まとめたのがこの書である。

従ってこれは中国についての参考書ではなく、専門の研究書でもない。中国については旅行記や案内書も多く、また各分野についてはいろいろの専門書も出ているので、そういう方面はこれらの本にゆずりたい。これは中国在住経験者の、在住中眼にうつった中国の断片的な記録である。日本から中国を訪問した人はすでに多数あるが、在住した経験を持つものはまだ比較的少ないので、あえてまとめてみたものである。

そのつどの見聞を、感じたこととともに書いてあるので、随分ひとりよがりのことも多く、ただらだらと書いたところもあり、読む人には迷惑なことと思う点もあるが、その時の印象を貴重なものと思い、あえて手を加えないことにした。ただ、この四年余りの期間は中国の政局に変

動が多く、事態がどんどん変っていったものもあり、前後の関連に説明を要するところもあるので、これについては手を加えた。本書が出る頃にはさらに事態にいろいろと変更があると思うが、そういう動きを見る時に、この書の各章が少しでも参考になれば幸いと思っている。

*

この書には政治問題については常識的なこと以外は書いていないし、また職務上経験した機微なことには触れていない。要人との会見なども少数の特例を除いてはほとんどすべて相当数の同席者のいた席上の話を引用するにとどめてあり、誰にも迷惑をかけることはないと思う。ここに書いてあるような経験や生活を通じて、私ももとより中国の政治、外交、経済、社会などについての観察、研究、判断はしていたし、今でもしているのであるが、それらについては離任して間もない現在、未だ書く時ではないと考えており、将来他の機会を持ちたいと思っている。

各章は特に時間的順序を追っていないが、離任する前の一年は中国の政局が激動した年で多くの重要な事件が起ったので、これは一章として時間を追って記述した。敬称、敬語はその場の雰囲気で使ったり使わなかったりしているが、これもそのままとしてあり、昭和と西暦を混用しているのもそのままとした。

この中国在勤を最後に、私は長い外交官生活を辞して新しい生活に入る。将来どういう生活に入るかわからないが、さし当り今秋から来夏にかけて、ワシントンのウッドロウ・ウィルソン国際交流研究所の招聘によりアメリカで中国問題や新しい国際情勢について研究することになった。従って本書は、私の人生の上で一区切りをつけるものとなろう。

中国での生活は面白いことばかりでなく、面白くないことも随分あり、家族には苦労をかけた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この書を出すにあたり、妻の嘉子、二人の娘、玲子、和子が慣れない環境のなかで終始協力してくれたことに対し、心から「有難う」と感謝の言葉を捧げたい。

私が渡米してしまって不在になるという状況のなかで、サイマル出版会の田村勝夫社長が事情をよく了解して全面的に助力してくださったことについて、またサイマル・インターナショナル村松増美社長の好意に対して、衷心からお礼を申し上げる。最後に、本書に出てくる中国の友人その他、中国で親交を結んだ方々に遙かにご挨拶をおくりたい。

（一九七七年十月）

小川 平四郎

北京の四年——目次

まえがき

序章——赴　任……1

Ⅰ章——初代大使として

1 中国要人たちとの接触……17
2 日中交渉の任に当って……38
3 二つの大会と批判運動……44

Ⅱ章——北京での日々

1 中国を訪ねる人びと……61
2 中国語と日本語の間……70
3 中国にいる日本人……88
4 映画演劇、マスコミと情報……98
5 外国要人の訪中……114

6 北京の街・北京の人びと……125
7 公邸の話題……136

Ⅲ章——中国の旅

1 中国国内の旅行……149
2 延安行……155
3 革命の故地……162
4 大慶と大寨……171
5 遙かな歴史を訪ねて……177
6 雲南の旅……186
7 重慶・成都訪問……195
8 忘れ難い新疆……208

Ⅳ章——激動の年

1 周恩来死す……221

2 天安門事件と鄧小平の退場……227
3 朱徳の死に続く大地震……237
4 毛沢東の死去……247
5 四人組事件顚末……255
終章——離　任……267

序章——赴　任

一九七三年（昭和四十八年）三月三十一日の昼少し前、私は香港から中国へ入る国境の橋を渡ろうとしていた。

とうとうこの橋を渡る時がきたのかという感慨とともに、さまざまな想念が胸の中を去来していた。過去二回にわたる香港勤務の間、何回か人を送るために、また人を迎えるために、この橋のたもとまで来たことがあった。その時いつも、自分自身はいったいいつこの橋を渡るのであろうか、遙か昔、三年近く留学に過した中国を再びこの眼で見るのはいつであろうか、と考えて感慨にふけったことが想い出された。

いまその時がきている。しかも戦後日本国の派遣する初代の大使として、中華人民共和国の首都北京に赴くためにこの橋を渡るのだという感慨は、やはり一通りのものではなかった。隣りにいる妻もまた、感慨深げに振り返って香港の山々を見ていた。

私たちは、夏を思わせる暑い太陽の照りつける国境の橋を徒歩で渡った。数年前まで、まだ日中間に直航便のない頃に中国を往復した人にはなじみ深い国境の風景である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

香港側の羅湖と中国側の深圳との間にある小さな深圳川を、三十メートルほどの鉄橋で渡る。五星旗のひらめく橋のたもとには解放軍の兵士たちが立ち、検問している。初めて見る兵士の姿はものものしいが、手続きは簡単で、型のごとく入国の手続きをおえて九竜税関と書いた大きな税関の建物の休憩室に入る。広東省革命委員会の人が橋まで出迎えてくれて丁重な挨拶があり、広州に向う汽車が出るまでの間、昼食と休憩をとる。休憩室には『毛主席語録』や「人民中国」など、その後始終眼にする中国の出版物が並べてあるが、中国に入ったのだという実感がなかなか湧いてこないのが奇妙であった。

広州行の汽車は大型の列車で、八分目ほどの乗客であり、日本人も相当乗っていた。後に何回か往復した際には冷房車がついていたが、この時には冷房がなく、三十度を越す蒸し暑い広東の平野を二時間ほど走って広州市につく。

広州は夕立ちの最中であった。広州市革命委員会の人の出迎えをうけ、貴賓室で小憩したが、雨がやまないので、飛行機が出るまで街を案内しようかという出迎えの人の好意を謝して、すぐに飛行場に向った。三十年前に一週間ほど滞在した広州の街の記憶をたどってみたが、果して見知った街であったかどうかさだかでないままに、郊外の白雲飛行場についた。

ちょうどカメルーンの大統領が上海から到着するというので、雨が小止みになった飛行場には若い男女が色とりどりの服装でドラや太鼓をならし、歓迎の陣を敷いているのを見た。そのものものしさにいささか驚いたが、北京に住んでからは、何回も見慣れることになる風景であった。

飛行機はソ連製のイリューシン62という大型機で、特別席に案内され、夕暮れの中を一路北京に向って飛び立った。

北京着任

夜の北京飛行場は、寒さがまだ残りながら、さわやかな気候であった。中国外交部の人びとが、先着の大使館の館員幹部とともに機側に出迎えてくれた。私が東京をたつ時、中国政府の儀典長は日本にも来たことのある韓叙という人だと聞かされていた。従って私は、この人が出迎えてくれるものと思っていた。

機を下りると館員の一人が、今日儀典長の交替があった模様で、出迎えには有名な王海容女史が来ているとささやいてくれた。小柄な王女史から歓迎の言葉をうけ、当方からも挨拶して休憩室に入る。王海容さんは一般には毛主席の姪といわれている人で、当時外交部部長助理（副次官ともいうべき職）だったが、韓叙儀典長がアメリカに赴任することになったので、儀典長の職を代行することになった模様だった。アジア司司長（局長）の陸維釗氏がともに出迎えてくれた。この人は後にパキスタン大使に転出した。

すでに駐在していた五人の邦人新聞記者諸君から（私の滞在中に交渉の結果その数は十一人に増えた）、さっそく記者会見ということで着任の所感を求められた。私は、変りつつある事態の下に初代の大使として赴任してきた責任の重大さを痛感する、これから長く続くべき日中関係の第一歩の基礎づくりを地道にするのが任務と心得ているとのべたが、これは私の実感であり、在任の間を通じて心がけたことであった。

夜の闇の中を、飛行場から続く並木道を街に向って走った。後に何十回と往復することになるこの道も、ただ壮大な並木のみが闇の中に見えていた。

北京飯店――これは数年前まで中国に行かれた方には、なじみの深い大きい古いホテルである。現在は東隣りに一七階建ての新館ができて、旅行者は主としてそちらを利用するが、私が着いた時はまだ古い趣きのある方の建物であった。公邸に移るまでの二週間、私たちはここの一室に起居することになった。

先発して大使館開設に当っていた十数名の館員諸君が、すでに深夜近くなっているのに集ってくれ、こもごも苦心談を聞かせてくれた。私はその一言一言を注意深く心にとめた。

日中両国政府の、なるべく三月一杯には初代大使を交換したいという希望により、中国側は陳楚大使が数日早く東京に着任し、私は三月も最後の三十一日に北京に着任したのだった。四月一日は日曜日、従って中国側との接触は月曜日に行なうこととし、四月一日は中国側が提供してくれた新築の大使館事務所と公邸とを視察し、先着の館員諸君の苦労を実地に見、これからの手順などを打ち合せた。夜は館員夫妻、私たちに同行した新しい館員夫妻など皆一堂に会して、これからの新しい生活についての覚悟を語り合った。

信任状を提出して

新しい大使が着任すると、まず儀典長を訪問して着任の挨拶をし、信任状提出の打ち合せをす

るのが普通である。この点は中国も同じで、四月二日朝、型のごとく儀典長（前にのべた王海容女史）を訪問した。王女史の話では、できるだけ早く信任状の提出を取り計らいたいが、その前に姫鵬飛外交部長がお会いする予定であるとのことで、午後、外交部長を訪問した。

その後何度も会い、また交渉相手ともなった姫鵬飛外交部長は暖かく迎えてくれ、日中国交正常化の意義や、これからの両国関係への期待などをのべた。ついで、「遠路赴任されてお疲れのところを申し訳ないが、できるだけ早く活動がおできになるようにと思い、信任状の提出を明日行なうようとりきめた。ちょうど董必武国家主席代理は広州にいるので、ご苦労ながら明日広州に行って信任状の提出をしていただきたい、そのためのアレンジメントはすべて中国側で準備してある」ということであった。こうして私は、二日前に通過したばかりの広州に翌朝再び飛び立つことになった。

四月三日早朝、飛行機で広州に向う。中国側からは陸維釗アジア局長が同行し、大使館からも数名の館員が同行した。飛行機は長沙で休憩し、すぐ広州に向う。広州では迎賓館の一つが用意され、すぐその日の午後、董必武主席代理への信任状提出が行なわれた。

董必武氏の名を聞くことは久しい。すでに一九二一年、上海で開かれた中国共産党第一回党大会に湖北代表として出席し、紅軍大長征の頃には毛沢東、朱徳、周恩来などの名にまじって、董必武という日本の法政大学（当時専門学校）に留学した勇士がいると聞いていた。また戦争中は重慶に中国共産党代表として駐在しており、さらに一九四五年の国連創設会議には、中国代表団の代表の一人として出席している。中華人民共和国成立以来、各種の要職を歴任して、今や元老の一人となっている人であった。一八八六年生れというから、この時八十七歳の高齢であったが、

国家主席だった劉少奇が文化大革命の中で姿をかくしてから、代主席（主席代理）として国家元首に相当する地位にあったわけである。

董氏が冬のあいだ寒さを避けて住んでいる邸宅に赴くと、朱伝賢儀典次長の出迎えをうけ、玄関を入るとすぐの広間に董必武氏が立っていた。写真で見た通りの口ひげをはやした好々爺である。握手して、持参した信任状を、ここに信任状をお渡しいたしますとのべて手渡した。董必武氏は有難うとのべ、受け取った信任状を侍立していた朱儀典次長に渡し、続きの応接室に私たち一行を招じて着席し、懇談に移った。

元首が外国の特命全権大使の信任状を受理するやり方は国により異なっているが、総じて厳粛、荘重なものが多いようである。わが国でも時折り皇居のお堀ばたを美しく飾った宮内庁の馬車が、信任状捧呈に赴く外国大使を乗せて走っているのを見かける。

私の前任地デンマークにおいてもそうであった。燕尾服を着てシルクハットを持って待っていると、威儀を正し着飾った儀典官が迎えにくる。四頭立ての美しく飾った馬車に同乗して王宮に近づくと、騎馬の儀杖兵が馬車の前後につき、王宮に入る。入口に侍従長が待っていて、立ち並んだ儀杖兵の閲兵がある。さらに奥に入ると宮廷の文武官が並んで待つ前を挨拶して通り、国王が待っておられる部屋に案内され、国王の前に進んで信任状を捧呈したのであった。もっともデンマークでは最後の部分は比較的簡単で、信任状をお渡しして挨拶すると、あとは気軽な会話となり、十分ほどお話をして退去したのであったが、これはデンマークという国の王室が極めて民主的で、気さくな国王のお人柄のためであったかと思われる。国によっては盛装の大使館員が多数随行したり、また挨拶の言葉、いわゆる「言上ぶり」をあらかじめ提出しておく必要のあると

ころもあるようだ。

こういう他国の様子にくらべると、中国の捧呈式は簡潔であった。簡潔ではあったが丁重さと暖かさに欠けるところはなかった。馬車にはもちろん乗らなかったが、「紅旗」という大型自動車が提供された。中国に一度でも行ったことのある人はご承知の通り、この「紅旗」は中国要人と外国の貴賓だけが使える自動車である。後に時折り日本からの訪問者の間で、誰が「紅旗」を提供されたかの問題で論争が起るのを見聞したことがある。

董必武氏とは一時間ほど懇談した。先方には何英外交部副部長（次官）、陸アジア局長、朱儀典次長その他数名が陪席し、当方は橋本参事官、藤田書記官、小原書記官など、大使館からの随行者が陪席した。その他にやや離れて中国側に数名の青年男女が同席し、しきりにメモをとっているのが不思議な光景であった。

型通り私から新任の挨拶の言葉をのべると、董必武氏はこれを謝し、日中関係の過去、現在について語り出した。八十七歳の高齢とは思われぬ元気さで、談論風発という感じであり、日本や日中関係の現状についてもよく承知しているようであった。日中両国は一時不幸な関係にあったが二千年の昔から親密な関係にあり、これからも世々代々友好的関係を続けるべきであるということを基調にして、日本の現状をコメントしたり、中国の現状を語ったりしつつ雄弁に話が進んだ。私から百年、二百年のことを考えての基礎づくりのため努力したいと言ったところ、董氏は笑いながら、「大使が百年、二百年とおっしゃるのは短い。日中関係は千年、二千年、子々孫々続く友好です」と口を入れた。なるほど、ここは中国なのだと感じられた応酬で、世々代々、子々孫々という言葉はこれから何回も聞くことになるのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com